
悪夢の果てに

暁りいや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪夢の果てに

【Nコード】

N6542E

【作者名】

暁りいや

【あらすじ】

FINAL・FANTASY12の二次創作です。ヴァン、バルフレア、バツシュ。3人は互いの想いを知りつつ、自分の道を歩みます。悪夢は、いつか終わるのか…。

0・告白

「何だよ恥ずかしい…さっさと見えよ」

俺が急かしても、そいつは先を言わない。

「お前、そんな奴じゃなかっただろ」

と言っても、無駄だつて分かってるけど。

「俺の事…好きなんだろ？」

分かってるよ。

お前が俺を、好きなことくらい。

1 ・俺とバルフレアとバツシュ（前書き）

俺は密かに、二股をかけていた。

1・俺とバルフレアとバツシュ

「…ヴァン」

バルフレアの手が、ゆっくりと俺の頬を撫でる。

俺はくすぐったかったが、それに抵抗する気持ちも持ち合わせていなかった。

大人しくされるがままになっていた。

「今日はやけに素直だな。どうした…悪いモンでも食ったか？」

「…そんな事ない」

俺が膨れて言うと、バルフレアは笑う。

…その、俺にしか見せない（と思う）笑顔が好きだ。

もちろん、バルフレアは全部好きだけど。

でも、その中でも、笑顔が大好きだった。

「…お前をこんな風に思う事があるなんてな」

「バルフレア？」

何だかバルフレアが自嘲気味な笑みを浮かべた気がして。

「つい最近まで、考えられなかった」

天下の空賊、バルフレア。

女を引っかけるのが大好きで、狙った獲物は逃さない。

顔立ちとかも綺麗だから、女の人によく誘われている。

バルフレアの相棒フランも、綺麗な人だ。

大体、人間とヴィエラヒュムが一緒に歩いてるってだけでも、珍しいのに。

「俺にこんなにハマるなんて、思ってたかった？」

俺が言うと、バルフレアはいつもの意地悪そうな笑みを浮かべた。

「言ってくれるね」

バルフレアが抱きしめて、俺たちの唇が触れ合ったから、自然な感じにキスになる。

バルフレアのキスは大好きだ。

…もう少し俺の事考えてくれたら、もっと嬉しいんだけど。

「ヴァン」

バツシュは、俺の頭を撫でる。

俺をいじるといふより、俺を可愛がってくれてるんだ。

「バルフレアに…何かされたのか」

「…何で？」

バツシュの眉間のシワが深い。

ここまでやきもちを妬いてくれるのも困りものだ。

「いつもより素直だから」

俺は2人連続で言われて、ちよつと可笑しくなった。

そんなに今日の俺は、素直かな。

自分ではよく分からない。

「別に、何もされてないよ」

ちよつとバツシュが可愛く見えたから、俺も頭を撫でてみた。

バツシュの髪も、好きだよ。

バルフレアみたく立ってないから（それだけじゃないけど。）

「でも俺、ちよつと嬉しいな」

「何が？」

俺は笑った。

「嫉妬してくれてるんだね」

2・恋を愛でる(前書き)

本当に2人は、気付いてないのか？

2・恋を愛でる

「待つて、バルフレア」

「遅い」

俺が走つてくると、バルフレアは俺の額にデコピンをした。

「な…何すんだよ」

「これだけで済んだことありがたく思え」

「…！」

バルフレアは意地悪そうな笑みを浮かべて言う。

何か予想がつく。

確かにデコピンだけで良かったのかもしれない。

「何だその顔は」

「…何が」

俺はバルフレアを睨んだ。

「そんなにしてほしいならしてやるけど」

「いや…っ、結構です…！」

ヤバイ！バルフレアの欲望に火をつけてしまったようだ。

ここは街のど真ん中だし、さすがにヤバイだろ（どこでもヤバイけど。）

「冗談だ」

「冗談じゃなかったら何なんだよ」

…と俺はつい言い返してしまつて、また『ヤバイ！』とか思ったけど、

今度はバルフレアも、さすがに分かつてくれたみたいだった。

「お仕置きはまた今度な」

「…いや、遠慮します」

「そこは素直に受け取つとけて」

バルフレアの大きな手が俺の頭に触れる。

この手の感触が、好きだった。

「待つて、バツシュ」

「私がいつお前をおいていった？」

俺が走つてくると、バツシュは苦笑した。

「…そうだよな、バツシュは俺を置いてかないもんな」

「可愛いお前を置いていきはしないさ」

「…うん」

バツシュは笑みを浮かべて言う。

俺は嬉しかった。

そうやって笑つてくれるバツシュが。

「大丈夫、絶対おいていかない」

「…？」

俺はバツシュを見た。

「お前を、おいて逝つたりしない」

「…！」

バツシュが俺を抱きしめる。

でも、ここは街のど真ん中だし、さすがにヤバイだろ（どこでもヤバイけど。）

「…冗談だ」

「何が？」

…と俺はつい聞き返してしまっ、すぐに分かったけどバツシユは言ってくれた。

「ここでは抱かない」

「…どういう意味で？」

「普通の意味で」

バツシユの大きな手が俺の頭に触れる。

この手の感触も、好きだった。

3・気づかれた(前書き)

バルフレア、バツシュ、俺の想いに、気づいちゃったんだね
…。

3・気づかれた

「…なあ、ヴァン」

「何？」

俺は、嫌な予感があった。

バレたんじゃないかという。

「…この頃、バツシユと仲良いな」

「……そう？」

バルフレアはこっちを見ない。

俺もバルフレアと目を合わせられる自信はない。

「俺にはそう見える」

「……そう」

バレてしまったかもしれない。

俺が二股をかけている事 ……。

「俺はお前に気持ちを言った」

「…うん」

「でも…」

バルフレアの真っすぐな瞳が、俺を捉えた。

「お前の気持ちを、聞いてない」

「…なあ、ヴァン」

「何？」

俺は、嫌な予感があった。

バレたんじゃないかという。

「…この頃、バルフレアと仲良いな」

「…そう？」

バツシユはこっちを見ない。

俺もバツシユと目を合わせられる自信はない。

「私にはそう見える」

「…そう」

バレてしまったかもしれない。

俺が二股をかけている事

…。

「私はお前に気持ちを言った」

「…うん」

「でも…」

バツシユの真つすぐな瞳が、俺を捉えた。

「お前の気持ちを、聞いてない」

2人にバレてしまったかもしれない、この想い。

次に聞かれた時は、もう言い逃れできないだろう。

だがどうあろうと、2人を好きなこの気持ちは変わらない。

正直に言っても、言えなくても、好きなんだ。

俺はどっちも好きだよ。

4・嘘はつけない(前書き)

俺はもう、嘘をつくのはやめるよ。
本当に2人が、大切だから。

4・嘘はつけない

俺だって後ろめたい気持ちはある。

いくら本当にバルフレアとバツシュ、2人とも好きだからって、
気持ちにごまかしは効かないって、心をごまかしても。

2人の気持ちを弄ぶもてあそような事になってるって、分かってる。

きつと、「好きだ」って言っても届かない。

2人は、俺の手の届かない場所にいる。

天下の空賊には、美人の相棒がいる。
元將軍には、護るべき王女がいる。

…俺の入る隙間なんてないくらいに。

2人が俺の事好きだって知った時、俺はとても嬉しかった。だって、俺は2人の事好きだったんだから。例えこのまま、2人ともを裏切るはめになっても、今は幸せで

…。

今が幸せで。

そうすれば未来にも、言い訳できるような気がしてた。

ねえごめんね、バルフレア、バツシユ。

俺は2人の気持ちを軽く見てたみたいだ。

「大丈夫、どっちも好きなんだから…」

そんな風に思っつて、俺はどっちとも付き合っつてたんだよ。

2人が俺を好きだから、俺が2人を好きだから、

2人ともと付き合えるなんて思っつてた。

だから俺は、もう甘える事をやめる。

ごまかす事をやめる。

自分の気持ちに正直なんて、そんな正直はもうやめる。

俺はこれからも、2人と仲間であるために、そんな嘘はやめるよ。

せつかく手に入れた幸せがこんな簡単に終わるなんて…少し、悲しいけどね。

5・謝罪（前書き）

これは避けられない事だから

∴。

5・謝罪

「…やっぱり、か？」

バルフレアの溜息にも似た言葉に、俺は何も言えなかった。呆れるのは当然だから。

「でも…分かったた」

「……何を？」

俺が顔を上げると、バルフレアは目をそむけた。

「お前がバツシユを、好きだつて事 ……」

「!!!!!!」

その言葉は、俺の心に深く突き刺さる。

バルフレアはこんなに苦しんでたのに…

俺は気付かないで、ごまかしきれると思ってた？

「ごめん、ごめんね…っ」

自然に涙があふれた。

バルフレアが俺の傍からいなくなることじゃなくて…

自分の愚かさに。

こんなに俺を想ってくれたバルフレアを、最悪のカタチで裏切ることに。

「俺、もう…」

バルフレアの隣には、いられないよ。

俺はその場から逃げだした。

次はバツシユの許へ向かわなければならぬ。
ただ俺は、さっきまでの事で落ち込んでいた。
今度はバツシユの悲しそうな顔を見るの？
今までだまし続けてきたツケなのか
…。

「…バツシユ」

「どうした？ヴァン」

バツシユは俺の頬に手を伸ばしたが、振り払って言った。

「ごめんね…ごめんね、バツシユ!!」

今度は手が伸びてこないのは、謝罪の意味が分かったから。
きっとバツシユも、俺の裏切りを分かっていた。

「俺…っ、バルフレアも…」

「…分かってる」

バルフレアも、好きだったんだ、俺。

どちらも譲れないくらいに愛してたんだよ。
だからこんな結果になってしまった。

ねえごめんね。

謝っても心の傷は消えないけど。

今の俺には、謝る事しかできないよ。

もし許されるなら、時を戻して…。

バカな事をしようとした俺を、止めてあげたいな。

6・心に救済を(前書き)

まだ、こんなに好きなのに…。

6・心に救済を

大砂海、オグル・エンサが前方に見える。

俺たちは何の会話もないまま、シュトラールから歩いてきた。

パネロ、フラン、アーシエも俺たちの異変に気付いているのか

…。

遠慮しているかのように、3人は先に行ってしまった。

だけど、この3人だけを残されても困る。

俺はできれば、今は2人とは顔を合わせたくない。

自分のせいなんだけど、勝手だけど。

昨夜は一睡もできなかった。

昨日の言葉が、2人の顔が頭について離れない。

今もまだ、2人の言葉を、一字一句間違えないで言える自信がある。

でもきつとそれ以上に、2人は俺の言葉がショックだったんだろう

な…。

いつからだろう、こんなに2人が愛いとしくなったのは。

バルフレアと会った瞬間、俺は一目で惚れた。

そのヘーゼルグリーンの瞳に、吸い込まれそうなくらいに。

フランを見たときには、もうその感情はスタスタに切り刻まれたと
思ってたけど。

まだこんなに好きだ。

あの時とは比べ物にならないくらい、バルフレアに夢中になってい
る。

バツシュと初めて会ったのは、牢獄から抜け出てきた時だった。あの時はまだ、兄さんを殺したのはバツシュだと思っていたから。ただ憎しみでいっぱい、優しさを感じることもなくて、なかった。でも今は違う。

今は兄さんを想うよりバツシュの事を考える回数の方が多い。

こんなに2人を愛しているのに。
これ以上愛せないくらいなのに。

何で

…。

7・大砂海オグル・エンサ（前書き）

行かないでよ、2人とも…

7・大砂海オグル・エンサ

オグル・エンサはさすがに広がった。

俺は待機組としてバルフレア・バツシュ・フランの素晴らしいチームワークを鑑賞する。

…フランのポジションが、今まで俺だったことを、思い出しながら。「行きませんか？」

「そうね」

パネロとアーシエは何事が言つて、向こうへ行つてしまった。

俺は遠くから3人がウルタン・エンサ族を倒すのを見ていて。

2人が楽しそうに砂をすくうのを、見ていた。

誰もが、俺を避けている気がする。

バルフレアも、バツシュも、パネロも、フランも、アーシエも。

途中で合流したウォースラさえ俺の方を一瞥しただけでもうこっちを見る事はなかった。

何だろう…。

そんなに俺が、近寄りがたいオーラを出しているか。それとも。

俺の想いが。

2人への想いが。

抑えきれなかったのか…。

ナム・エンサには入れず、俺たちは適当な所で野宿する事にした。
テントは4つ。

皆は遠慮していた。

だから俺は、一人でゆっくりと、色々な事を考える事ができた。

見張りは俺がかって出た。

どうせテントでも1人なのだから。

いつもならこうしているとバルフレアか、バツシュ。

どちらかが来るのだが今日は誰も来ない。

ただゆっくりと、夜が更けていくのが感じられた。

「…寒い」

大砂海の夜は寒い。

俺は毛布をかぶって、ウルタン・エンサ族が来ないか見ていた。

まあここら辺のモンスターは昼間、4人が狩っていたが。

…そう考えると、俺はものすごく悲しくなった。
涙がとめどなくあふれてきて。

何がこんなに悲しいのかわからない。

「…っ」

皆が羨ましい。

バルフレアとバツシュと、普通に会話している人が。

何よりも、2人が。

俺は寝つけるわけもなく、そのまま夜を過ごしていた。

8 ・伝えてない想い（前書き）

俺、2人にまだ言っていない事があるよ。

8・伝えてない思い

これが『失恋』。

俺は2人に会うまで、『恋』なんてものはした事なかった。勿論『一目ぼれ』なんてもってのほかで。

初めて一目ぼれしたのは2人なんだよ。

そして、初めて失恋したのも2人なんだよ。

多分、始まってから1か月も経たない内に終わったこの恋。

普通は男が男を好きになるなんて、ありえない。

俺だって2人を知るまでは、絶対ない！って言った。

でも今は違う。

『気持ち悪い』とかもう何言われてもいいような気がした。

それくらい『恋』ってというのは盲目で。

相手の事を本当に思っているなら、性別の違いさえ乗り越えられる。

そう、バルフレアとフランのように。

男女の間に友情がアリなら、男の間に恋もアリでしょ！？

俺が男なことか、

2人が男な事とか。

2人が護るべきものがあるとか。

そんな事もう全部忘れちゃえ！

俺が謝った事もね…忘れたりほしくないけど。

それは忘れられないよ。

あんなに楽しかった思い出は…忘れられないから。

兄さんがいた時からこんな幸せに思ったことはない。

いや…兄さんがいた時以上に、幸せかもしれない。

2人がいてくれたから俺はここまで生きてこられた。

牢獄にいた時だって希望を失わないでいられた。

地下道にいた時だって、先頭を突き進めた。

全部2人がいてくれたおかげなんだよ…？

2人が俺を愛してくれたから…

俺が2人を愛していたから…

俺は2人に謝っただけど、まだ大切な事を言っていない。

ねえ、一番大切なこと。

もう一度だけチャンスを下さい……神様。

9 ・ ホントの気持ち（前書き）

翌日、オグル・エンサ。

俺はこの気持ちを言葉にする事に決めた。

9・ホントの気持ち

「ねえっ、バルフレア、バツシュ!!」

俺は別々の場所にいる2人を呼んだ。

2人は振り返らなかつたが、聞こえていることは分かつた。

「聞いてほしいことがあるんだ!」

そう言うと、フランは提案する。

「じゃあ私たちが戦闘組になりましょう」

俺は心から、フランの優しさを感じた。

「ありがとう…フラン」

「ようやく踏み出せたのね…坊や」

うん。

皆のおかげで。

俺はバルフレアとバツシュに、言った。

「
∴俺、2人とも好きだよ」

俺はうつむいて言ったから、2人がどういう顔をしたのかは分からなかった。

「顔を上げてもっかい言ってみろ」

バルフレアの声は、普通だ。

別に怒ってる様子もない。

バツシュだって、いつもの表情。

優しい、俺を想ってくれている時の、表情だ。

「あのね…俺、2人の事、好きだよっ！！！！」

バルフレア、バツシュ、ちゃんと分かってくれた？
俺が絶対に取り戻したいと思っただけだ。
謝るよりも大切な事があったんだね…。

でもね、俺なら、謝るより感謝されたいな。

「ごめんね」

より

「ありがとう」
かな。

「はな...」

「生きててくれて、ありがとう」

9・ホントの気持ち（後書き）

随分短い小説でしたが、無事に最終話を書けた事にホッとしています。

ここまで見て下さった皆さん、ありがとうございました。
次は番外編を書く予定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6542e/>

悪夢の果てに

2010年10月28日07時13分発行